

Title	<批評・紹介> 鈴木俊編「東洋史史籍解題」
Author(s)	小川, 茂樹
Citation	東洋史研究 (1936), 1(6): 567-569
Issue Date	1936-08-30
URL	http://dx.doi.org/10.14989/138713
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

東洋史史籍解題

鈴木 俊編

平凡社世界歴史大系第二十五冊
史籍解題第二部

平凡社世界大系の一冊たる史籍解題に、國史西洋史と並んで第二部を東洋史が占めてゐる。解題は漢籍洋書に二分され、前者は書名の五十音順、後者は著者名のアルファベット順に排列され、各項目には参考書翻譯書取收叢書名が挙げられてゐる。次に附録として東洋史研究參考書一覽が添えられ、一般史・特殊史・斷代史・塞外外國史等に區分して要書の目を示す。卷末には書名總索引があり解題内の各叢書の簡単な子目索引をも兼ねる如くされる。

以上の如き組織は誠にこれから東洋史をば研究せんとする者、國史西洋史の専門家の爲の手引たらんとすると云ふ編者の目的に適合し、極めて便利に出來てゐると云つても良い。唯その反面には、解題内に餘り史學に關係のない膨大な叢書の内容目録を無差別に登載する事により、貴重な紙面を空費する破目に陥つてゐる。叢書内容目録及び叢書子目索引は、近來數種多の良書も出版され

てゐるのであるから、之に譲つて、（勿論此の編輯方針は國史とも聯關する問題ではあるが）今少しく史學的なる選擇がありたかつた。初學者の爲と云ふ方針で各史籍解題に參考書、翻譯書を掲げられたのも極めて有意義であつたが、翻譯書としては外國人の翻譯、研究が多く載せられ、參考書も支那刊行の者が多く、古典の國譯及び日本の訓點注釋本が殆んど閑却されてゐる如く見えるのは遺憾である。此の點に於て長澤規矩也氏の支那學入門書略解に於けるが如き用意がありたかつた。又凡例に於て版本に關する敘述を割愛することを斷はられてゐるが古版本に關する精密な書誌學的な考證は不必要なことは勿論であるとしても、最も普通に於て最も便利なる然も信頼し得るテキストの選擇は、専門家にとつて容易であるが、初學者には困難であるところから見て、是非その指示が欲しい。かゝる用意は、參考書の項目に於ては最も必要であらうが、其の點に於ても遺憾の點がある。例へば漢書に於て王先謙の漢書補注が先づ挙げられたのは極めて妥當であらうが、（二六頁）同様な意味で水經では同人撰合校水經注が先づ最初に來るべきであるのに、全然之を漏らしてゐる如きである。（二一〇頁）史籍の選擇に

就ては編者も凡例に補遺を附するの已むなきに至つた不備を自認して居られるが、限られた紙面を考慮される編者の立場を思ふ時、我等は望蜀の多言を發したくない。唯漢の應劭の風俗通義を載せて、蔡邕の獨斷を載せず、或は唐道宣の續高僧傳が著錄せられながら梁の慧皎の高僧傳——單に佛教史上の重要書たるに止らず、六朝社會史の重要資料たる——の漏らされた如き、或清朝史學者の著述に於て、顧炎武の日知錄、趙翼の陔餘叢考等が挙げられながら、錢大昕の十駕齋養新錄が佚せられてゐる如き、補遺に梁啓超の清代學術概論を加へながらも、全祖望の宋儒學案・明儒學案が遂に佚せられて仕舞つた如きは、一見した不備である。その解説に於ても、その可成り多量の誤植以外、所々に錯誤が見出される。例へば舊唐書が歐陽脩が新唐書を撰した後散逸し、清に至り再び世に出たとなすが如き、（三〇頁）司馬光撰の通鑑考異三十卷を胡三省撰と誤つた如き、（七七頁）後漢書の參考書項目中に楊樹達の漢書補注補正をば誤入するが如きは之である。參考書の指示に於ても最近の文獻が脱落してゐるものが相當目立つ。最も便利な燕京大學出版の引得が當該各項目に見出し得ないが如き、或は長安志圖、唐兩京城

坊考雍錄に於て、最近の石刻唐太極宮暨府寺坊市殘圖大明宮殘圖(考古專報第一卷第一號)が引かれない如きがその一例である。又殷虛書契を補遺に入れるならば、之に關連して參考書として、或は參考書一覽の内に殷虛書契考釋及び殷虛文字類編は兎に角として―最近の孫海波の甲首文編だけは是非入りたい。

以上は一讀の際氣付いた處であるが、今我等は、かゝる缺點を一々拾ひ上げるよりも、寧ろ四ヶ月の短時日の間に一方は限られた紙面に拘束されながら、兎に角或る程度に完全な東洋史々籍解題、編者の所謂日本文で書かれた最初の史籍解題の誕生を祝福し、編者等の勞を多としたい。唯かゝる完全な史籍解題の編纂は、第一段の作業として各専門別の要書目―例へば箭内博士の蒙古史研究の附録たる元史研究參考書目或は容庚氏の金石書錄目の如き―の編纂が必要であり、その上に始めて完備した東洋史書目が成立するのであり、多數の廣範圍の専門家の協力によつてのみ可能な事業である。此の史籍解題の出版を期として、各専門家の各々の立場よりする補正が單に一々の缺點を拾ふに止らず、進んで各部門別書編纂と云ふ方向に向ひたい。

(小川茂樹)